現地通信

マレーシア調査の現地から

棚　瀬　襄　爾

(1) 近代都市クアラ・ルンプール

私と吉田光邦氏（人文科学研究所）の二人は後続部隊に1ケ月先立って，6月1日羽田を立って一路 Bangkok に向った。機上から手に取る如く見える長蛇の如き Mekong の流れを見た時，「我今東南アジアに在り」の感がひしひしと湧く。Bangkok のドンムアン空港にタイ調査班の飯島君，矢野君が迎いに出てくれた。4日間程京大リエイゾン・オフイスのお世話になり，最後の日，オフイスに赴任された相良教授御夫妻に連絡してから，再び機上の人となり，一応の目的地 Kuala Lumpur に着いたのは6月5日であった。K.L. では Majestic Hotel を常宿とすることにきめた。格式の高い割に安いというのが主な理由である。

K.L. はクラン川とゴムバツク川の合流点にある美しい町である。英国式のグリーンも美しいし，アラビア式のステーション，モスク，官庁建築物もエキゾティックな印象を与える。それにマラヤの独立してからの政府機関その他の建築は急ピッチで，国会議事堂，マラヤ大学，博物館など殊に見事であり，建築に工夫が凝らされていて，恐らく建築の専門家が見られたら興味が深いことと思われる。

ホテルには冷房があり，ロブスターその他の料理も却々うまくて快適である。6月ではバンコックよりも一層涼いし，塵埃もない。靴は幾日磨かなくてもピカピカ光っている。まづ一国の首都として恥しくない見事さである。これが100年前には一小村にすぎず，葉亜来をはじめとする中国華僑が，コレラやマラリアと戦いながら周囲の錫鉱を開いた中心とは思われない程の発展ぶりである。しかしK. L. ですら時々熱帯が姿を見せる。カメルーン高地に虎の一家族が出没し，鉄砲で打ちそこなうと大変だから吹矢を使えという主張があったり，K. L. 市中でコプラが何匹捕ったとか新聞が報じている。フォルマリンを打込んで捕えるのだという。

私と吉田君の K.L. での仕事はまづ日本大使館の助力を求めること，薬品，研究資材の蓄積所を作ること，三井物産はじめ若干の日本商社に便宜を与えて貰うこと，マラヤ政府機関に了解と助力を求めること，マラヤの大学の先生に意見を聞くことなどである。幸いに何れも好意的でマライ大学の先生達はマラヤには社会科学的な調査が不足しているからと大いに鞭撻してくれたし，農林省と文部省の高級官吏は貴重なサジエストをしてくれた。

私達が大学で会った主な人は Mr. Foo Yeow Yok (Registrar), Mr. R.S. Nathan (Assistant Registrar), Prof. S. T. Alisjahbana, Prof. Wang Gung Wu, Prof. D.S. Maclusky 及び Mokhzani bin Abdul Rahim, Syed Husin b. Ali, Syed Hussein b. Alatas 氏など三人の若い人類学の講師である．前回マラヤ大学訪問時に面識のある人々もあるが休暇帰国中であったり，外国へ赴任したりしていて，ここの人事の交流もかなりはげしいと見受けられた。

しかし私達が試みようとしているのは主としてマラヤの田舎の調査であるから，K.L. にいる人では直接の役には立たない。むしろ K.L. にいても現地に顔のきく人が有難い。その為に農林省の Mohd b. Jamir (Director of Agriculture) Lew Sip Hon (Deputy Permanent Secretary of Agriculture) Chang Min Kee (Director of Teacher Training Dept.) などの助力が有難かった。

物資蓄積には新しく開かれた Japan Club の一部を使わせて貰うことになり，厄介な荷物を一時的におくところもできた。

この外多数のマラヤの人々にも会ったし，殊に萩原氏，姉歯氏，尼島氏，下河辺氏，中村氏，武富氏，三宅氏など non-profit agencies の人々で K. L. にいて研究調査に従事している人は強い関心も示してくれたし，好意も見せてくれた。

(2) マラヤの東海岸とコレラ

吉田光邦氏の予備調査期間は1ケ月である。以上の中には吉田氏帰国後に連絡をつけた人々もあるが，吉田氏との同行中に是非行わねばならぬのは調査地の決定である。

マラヤは稀に見る民族問題のはげしい国である。マラヤには少数の未開民族や，ヨーロッパ人もいるけれども，主要民族はマライ人と中国人とインド人である。マライ人は50%を越えないし，中国人は35%程にも達している。然も夫々が生活様式を異にし，文化的背景も異にしている。文化などと言うと抽象的に聞え易いが，夫々職業も住居も，異にしているのである。水と油とまでは云えないにしても夫々の社会的距離はかなり遠い。マライ人は高床家屋に住み，主として農業をいとなみ，中国人は主として都市住民で商業をいとなむ者が多く土間住民であり，インドは長屋にすみ鉄道，道路関係者やゴム園労働者が多い。

職業が異なれば土地利用の面でも異る筈で，土地利用図がかなりな程度民族分布にも関連してくる。私は数年前の旅行でジョホール方面が何れも大規模なゴム園の緑でつつまれていることを知っているのでジョホール州を敬遠することにし，まづマラッカとヌグリ・スンビランを歩き廻ることにした。何れにも水田耕作のマライ系住民はいる。殊に Tampin や Kuala Pilah 方面は面白いと思われた。然しここのマライ人は住居の屋根の形式の異ることでも知られるようにスマトラから来住した Menangkabau 人が多く母系相続で慣習法 (adat) を異にしており，マライ人の中でも特異な存在である。この地方の研究はそれはそれとして面白いが，これもこの度は敬遠せざるを得ない。

汽車に投じた私達はまづコタバルに行き東海岸を車で南下して見ることにした。コタバルを中心とするクランタン・デルタにはマライ人が多いし水田もよく発達している。コタバル自身も他の都市とは異ってマライ人が多く，マライ臭のつよい町である。マラヤの伝統工芸であるクランタン・バチック，クランタン・ペラ（銀細工）などもここに一番よく残っている。ここには相当ひかれた。しかしマラヤの政情が私達を逡じゅんさせた。というのはクランタンだけは PMIP (Pan Islamic Malayan Party) がつよく，現聯邦政府の Alliance と政党が異っており，現政府の好意が受けにくかった為である。トルンガヌからパハンの東海岸は海岸も美しく，白砂に青い海と緑の椰子が映えている。マライ人の漁村もいたるところにある。しかし如何せん。コレラが多い。私達の車はトルンガヌやパハンの至るところで止められて注射証明書の提示を求められた。マラヤにはここ暫くコレラが出ていなかったが昨年あたりから出はじめ，今年は殊にトルンガヌ州とパハン州に多い。死者百数十名，患者は数百名である。二名のコレラ患者で大騒ぎをした日本に比べると状況が有難すぎる。しかもこれは病院でつかんだ数字であって，病院長談などによると病院にこないでコレラで死んだというのもあるらしい。如何に海岸の見かけが美しく南洋らしくても，まづ今年は東岸村落の調査をあきらめねばならない。

(3) クダー (Kedah) 州のアロル・ジャングス Alo Janggus を選んだ訳

東海岸をあきらめるとするとまさか中央部のジャングルに入る訳にも行かぬから西海部を選ばざるを得ない。しかし西岸部もペラ州は錫鉱の中心地であるし，プロヴィンス・ウェルズリーは英国の影響がつよく，又農業改造が行われ，稲の二毛作地帯で一寸ひらけすぎている感じである。とするとムダ川以北クダー州か，プルリス州になる。プルリス州はマラヤ最北端でタイ領にはさまれてもおり，元々はクダー州から別れた州でもあるので，結局マラヤ農村調査地をクダー州の米作の単作地帯ときめたのである。

私達二人はまず農林省から state agricultural officer への紹介によって agricultural office の世話になって Alor Star を中心に村さがしをはじめた。いくつかの村を見て廻ったが帯に短し，襷に長しである。しかしいつまでも迷ってもいられないので人口，戸数等の関係で Alor Janggus ときめたのである。殆どすべての人がマライ人であるが，Alor Janggus 自身は country town で70戸程の中国人の商店のあるのも面白いと思った。マラヤの民族問題の中でマラ

イ人，中国人関係は最も深刻であるが，実際農村部ではどういう関係にあるのかということもある程度調べられると思ったからである。

アロル・ジャングスは日本で昭和16年に発行された「英領マライ・北ボルネオ地名辞典」にも出ており，アロル・ジャングス川とジャウィ川の西岸にあるとあるからそれ程新しい村でもないと思われた。マラヤの人口は20世紀になってから急激に増えているから分蜂的な新村が多く，あまり新しい村でも困るが，その点でもまづ好ましかった訳である。それにインド人が4戸あり，同じマライ人の中でも Indonesian とはっきり識別されている家も4戸程あってマライ人口の縮図も見られるようである。

お隣には Kampong Padang Lalang という1戸の中国人を除き全村マライ人農家という手頃な村もある。まづこの二つをやればという気持であり，多大な権勢を持つムキム (mukim) のプングールー（村長）に学校前に借家もきめて貰った。Alor Star から9哩，幸いにバスは数年前から通っている。

このマラヤの穀倉地帯にはどこへ行っても井戸はない。井戸と称するのはマンディをするところで，飲水は雨水か，時々村長の要請によって水道局が水を供給するのである。このことは予め判っていたが，吉田氏と二人でレスト・ハウスに帰ってから「いやまてよ」一体便所はどこにあったのだろうと言うことになった。翌日もう一度調べに行くと，便所へ 50m 細い田圃のあぜ道を行くと一応のものがある。他の家のを調べて見るとひどいものばかりである。然しこの水と，この便所とではとても住めそうにない。家はオフイスに使って，アロルスターのホテルから通えばよかろうということになった。

これで一応調査地を決定して私達は K.L. に帰り，6月28日シンガポールに行く吉田氏を K. L. の Airport に見送って後続部隊の到着をまったのである。

(4) 私達のフィールド・キャンプ

口羽益生及び坪内良博両君の到着をまつ間，私は官庁出版物，統計類蒐集などに費した。両君が CX 故障の為にシンガポール廻りで K- L. に着いたのは7月10日。再び挨拶廻りをすませて，Alor Star にやって来たのは7月15日である。レスト・ハウスには長らく滞在ができないので Tai Aah Hotel を一応の常宿ときめた。前回逸した Education officer とDistrict officer に挨拶まわり。District officer に会って話をしている時に一つの発見をした。マライシアは連邦であるから，連邦を構成をする州ないし Negara が，かなりの力を持っていることである。Kedah 州は sultan を頂く王国なのである。私達はそこで Kedah の State Secretary, Dato Shuaib bin Osman 氏にアポイントメントを取った。役所に出頭して見ると Kedah State の Mentri Besar（総理大臣） Dato' Syed Omar Shahabudin Al-Haj 氏が会いたいと言っているからと言うので大臣室に通された。見るからに素晴らしい紳士である。Alor Janggus 調査の許可と了解を求めると，もとより心よく引受けてくれた上，その地方の水のよくないこと，蚊が多くて住めるかどうかなど心配してくれる。Mentri Besar のお子さんが今日本へテレヴィの修業に行っていること，弟さんが駐日大使であることなど四方山の話が出て，案外なところに日本のファンがあることを知って心強かった。

ホテルから現地のフィールド・キャンプを見に行った両君は「ここに住んで見ましょう」という申出でをしてくれた。水と便所は大丈夫かと念をおすと大丈夫でしようという。私と吉田君はこちらから住み込むとは言わぬことに申合せていたのであるが，若い諸君が申出てくれたのだから強制にはならない。「やって見よう」ということになった。一家をかまえるのだから設営は却々大変である。寝台，マット，シーツ，枕，蚊帳，テーブル，椅子，扇風器，大きな魔法瓶数個，水甕，薬灌，鍋，フライパン，食器，コーヒー茶碗，お盆，箸，スプーン，包丁，石油コンロ，消火器，たらい，洗面器，電球，スタンド，自転車，数えあげれば際がない。あらゆるものを買い込んで乗込むことになったのである。

マライ人風の高床家屋で6畳位の部屋が四つ，但しはっきりした仕切はない。それにたたきになった炊事場と水浴兼洗濯場がついている。家は比較的新しいが安建築で，床にはすき間があり，蚊の侵入をふせぐには寝台の下にティカルという筵をしかねばならない。風雨が強いとゆれるし，人がどしどし歩いてもゆれる。屋根は普通のアタップ（ニッパ椰子）葺でなくハイカラにトタンが使ってある為に却って暑い。扇風器はあっても昼間は電気が来ない。それでもまだよい方である。アロル・ジャングスのマライ人の家で電灯の

ある家は半分しかない。パダン・ラランでは一軒も電灯をつけていない。

Saad bin Bakar と Rokiah binti Hj Hamid という60才と45才になる夫妻が通いで来て世話をしてくれる。Saad は学校の天水溜から水を汲んだり，買物をしたり，お給仕をしたりしてくれるし，Rokiah は洗濯と料理である。きれいずきでよく洗濯をしてくれるし，料理も比較的おいしい。しかし残念ながら料理の種類はそれ程多くはない。来る日も来る日もあまり変化はない。魚のやいたの，油いため，なっぱと卵をにたもの，魚をカレーで煮たもの。魚の代りに牛肉のこともあり，蝦のこともある。それだけである。きゆうりと玉葱をきざみ，唐辛子を加えて酢にしたものは一寸さっぱりしたよい味であるがスープに類したものは一度も出ない。無理もない。マライ人はスプーンを使わずに右手の三本の指で食べるからである。果物もバナナかパインアップル位で田舎では珍らしい果物は容易に手に入らない。

私達はプングールー，学校の校長，トアン・ハジと呼ばれる有力者にまづ接近し，漸次村人に交わり，一応はアロル・ジャングスの全戸を訪問して聞取を行った。収入など聞難いと思った点は案外簡単で，他人の月給までも知っているが，聞にくい問題もある。殊に男女の区別がかなりきつくて奥さんが居ても主人が居なければまづ聞取は不可能と言ってよい。

7月28日から約20日間マライ大学留学中の前田成文君が調査の手つだいに来てくれた。前田君は自らAbdul Narif 等と称し，サロンを穿きアジヤストが早い。それに若くて元気がよい。大いに助かった。

村の人も子供もよく遊びに来る。村の女は Rokiah の処へ遊びに来て，台所からひそかに観察して行く。結婚式に招待してくれる人もあるし，モハメット降誕祭やクツア・カンポン (ketua kampong)（カンポン-自然村の長）の会食にも招いて貰った。今までのところ村人との関係はうまく行っている。中国人にも何人か友達ができて粽子など持って来てくれたりしている。

調査もぼつぼつ進んでアロル・ジャングスについては略一通りの聞とりができ，9月はじめから隣りの純農村パダン・ラランの戸口調査をはじめているが丁度田植で農繁期にかかってしまった。気永にやるより外はない。

(5) 風呂へ入りにペナンまで

クダー州はイスラムが比較的強くて金曜が休みになる。自分の日曜の気持と金曜休みがはじめは却々しっくり行かない。調査では人を捕えるのが大切で，休日などと言っておられない。一週に一日は休日にしようと言っていたが，はじめはうまく行かなくて殆ど休日なしに働いた。けれどもここでは休日より矢張り水が問題である。7月，8月の雨のあまり降らぬ間は飲水をアロル・スターまで買いに行ったりした。どぶ川の水はきたなくてとてもマンディはできない。ここまで訪問してくれたアジア経済研究所の萩原宜之氏はアロル・ジャングス川の水でマンディをしたら Dato の称号を与えると言ってくれたが，まだ Dato の称号を貰える人はない。汲んで貰った水でマンディをするだけである。大体このあたりのマライ人には風呂などと言う観念はない。川水やマンディ場でのマンディにもきまった仕来りがあって，暑いから何度でもマンディと云うのでもない。便所の下は水で，便所の中に魚が游いでいる。イスラムは人糞をハラム (haram) として肥料にも使わぬが，水が出たり魚が食べたりで，何時とはなく解消して行く。

8月の半ばまでは暑かったけれども土地も乾燥し，便所通いの道もそれ程苦にはならなかった。しかし8月末から急に雨が多くなった。このあたりはマラヤも北部でモンスーンの影響を受け，海から3哩程のこの村には時々烈しい豪雨が襲う。村人待望の雨だし，今年は ular besar（たつ）年で豊年だという期待の雨だから祝福すべきであるが，如何せん家は水の中に浮き，便所へは膝までの水に没って行かねばならない。K.L. でピカピカだった靴もここ暫くは全くはけない。部屋の隅でカビが生えている。

豪雨のマンディとしゃれ込んで見ても冷水ではいくら石鹸をつけても身体のアカは十分には落ちない。結局ペナンまで泊りがけで風呂に入りに行こうかという相談が持上る。タクシーで片道1時間半の豪華な入浴である。この前1ケ月程働いたところで一度ペナンへ風呂へ入りに行ったが，又そろそろ身体がねばっている。ぼつぼつペナン行を計画せねばならない。

いろいろ苦労なことだけれども，村に住み込んで見てそれ丈の収穫はあったような気がしている。しかし私はこんな苦労を隊員に強いる気持はない。生活困難な事態になれば何時でもアロル・スターまで引揚げて

くださいと言い残して日本に帰るつもりである。アロル・スターまでの引揚ですめばよいがというのが私の今の気持である。というのはインドネシア軍のポンチァン・クチールへの上陸とラバイへの降下で，ここ数日来とみにインドネシアのコンフロンテイションが緊迫の度を加え，この村にも自衛団が組織されたりしているし，9月7日にはヤン・デ・プルツアン・アゴン(king) はマライシア全土に緊急令を発布したからである。雨雲ばかりでなく戦雲まで動きはじめている。

(1964.9.10アロル・ジャングスにて)

タイ国北部のカレン族調査ノート

飯　島　茂

仕事の都合で2カ月余り蒸し暑い Bangkok に釘付けになっていたわたくしにとっては，空から眺める Chiengmai 盆地の景色がなんと美しかったことか。飛行機のタラップから降りると，目の前にある Doi Sutep の山肌の緑が目に痛い。それに吹いて来る風の甘さも格別である。やっぱり Chiengmai を調査の基地に選んでよかったとわたくしは思う。

こう書いてくると，すべてがいかにも快調のようだが，心の底にはなにか重くのしかかるものがある。それと言うのもわたくしがタイ国の研究についてはあまり自信がなかったからである。今年の2月末にセンターからタイ国に出張を命ぜられるまでは，仲間の矢野さんたちとともに，すっかりビルマ熱に侵されていて〝今ビルマに行けば，1964年のビルマはわれらのものになる…〟などとうわごとのようなことをたがいに言いながら，いそいそとビルマ関係の文献をあさっていたのである。しかし，残念なことにはビルマの政治情勢は日ましに複雑化して，今春になってついに外国研究者の長期滞在は事実上不可能であるという見通しになる。

このようにして，東南アジア研究センターのコアー・プロジェクトの一つであるビルマ班はタイ村落調査班に再編成され，本岡武助教授をリーダーとして，水野浩一，矢野暢両氏にわたくしが加って，1964年4月から1965年4月にかけてタイ国で調査に従事することになった。

わたくしはタイ国研究の素人なので，バンコックに着くなり，あわててこの国の勉強を始めた。チュラロンコンやタマサートの大学図書館や Siam Society の図書館に通ってみる。しかし，幸か不幸かこの国の山地民の研究ははなはだ少いようである。わたくしの心の中でハイド氏の方は〝やれやれ，これで文献調査の方が少し助った…〟と言う。一方ジギル氏の方は〝これはえらいことになった，どうやって仕事にとりかかろう…〟と途方にくれる。このような複雑な気持をかかえながらわたくしは Bangkok から Chiengmai に移ったのである。

いずれにせよ調査の準備に入らねばならないのだが，もっとも新しい Gordon Young の "Hill Tribes in Northern Thailand" にしても総括的すぎてそれだけでは調査地の見当をつけることすら無理である。それに北部タイの人のように山地民に囲まれて暮している人々でも平地の人はほとんど山のことを知らない。とにかく自分で現地を歩いて見なければ何も解らないと言う至極当然のことが再確認できた訳である。わたくしは Chiengmai を中心に Doi-Chiengdao, Doi-Musur, Hod, Mae Sarieng など，南北に約600キロ，東西に約100キロにわたりルコネッサンスを重ねる。その間わたくしはいくつかの条件を考慮に入れながら調査対象に選ぶ山地民をだんだんとしぼっていった。その結果 Karen 族を調査することに決定したのは，だいたい，つぎのような考えにもとずいたからである。

1) タイ国北部には大把みに言って，二系統の山地民が住んでいる。その一つは Sino-Tibetan 系の山地民と，他は Austroasiatic 系の者である。わたくしは従来ヒマラヤ山中に住む Tibet 系住民の研究に従事してきた関係から，当然タイ国でもSino-Tibetan

S'kaw Karen の老人と孫

系の山地民に興味が向いた。

2) これは意外に知られていない事実であるが，Karen はタイ国における非タイ系住民の中で中国系住民に次いで大きな人口を持つ重要な民族集団である。Gordon Young の1960年における推定によると，山地民約217,000人中約71,400人で山地民人口の1/3以上を占めていると言う。人によっては山地民の人口を約400,000～500,000人とふみ，その半数の約200,000～250,000人が Karen であると推定しているほどである。

それに Karen は隣国ビルマにおいては一州を形成しているほど重要な民族集団である。いつの日かやがてわたくしたちも国境の向う側に行って Karen を自由に研究できる日もあるだろう。その時のためにもタイ国の Karen を研究しておくことは役に立つだろう。

3) タイ国の Karen は山地民の中では例外的にゆるやかながら多数の者の移動が山地から平地へ向って，またビルマ方面からタイ国領へとおこなわれてきた。その移動波の新旧の差により，タイ族（おもに Khon Muang）との文化接触の程度の差が見出され，文化変容の研究に格好のフィールドを提供している。

4) さらにタイ国政府内務省公共福祉局山地民課はわたくしに山地 Karen の調査を強く希望した。それと言うのは山地民の研究は次第に盛になってきていて，最近は Pataya などのタイ国の学者はもとより，外国からは L. Sharp, L. Hanks, H. Manndorff, P. Kunstadter, F. LeBar その他の人類学者によって手がけられているにもかかわらず，ほとんどが Lahu, Lissu, Akha, Meo, Yao, Khamu, Lawa などに集中していて，Karen の研究は意外に少かった。日本からは大阪市大の岩田慶治氏や東大の大林太郎氏などがこの地方に入っているが，Karen に研究の中心を置かれていなかったように思われる。わずかに J. Hamilton が2年ほど前に Wang Lung で平地の P'wo Karen を集約的調査しただけである。

タイ国の Karen は S'kaw, P'wo, B'ghwe, Thaungthu の4グループに分れている。わたくしはその中で Karen の人口の過半数を占めていると言われる S'kaw Karen を調査することに決めた。

このようにして，当初，雲を把むような調査計画も

S'kaw Karen の山村，裏山には何年か前に焼畑がおこなわれた跡が見える．

S'kaw Karen の男の子

ルコネッサンスを数回重ねる間に次第に具体性をおびていった。そしてわたくしが調査地に決めた場所は Chiengmai から西南方に175キロメートルほど行った Mae Sarieng 地区にある一山村である[1]。標高は約1,050メートルほどの所にあるこの村は23戸からなる S'kaw Karen の村である。村の農業は陸稲のほかに少しばかりの水稲と自家用の貧しい菜園を持つのみである。家畜としては少数の象，水牛，豚，やぎ，鶏を飼っている。象はチーク運びなどの労役に使われ，水牛ややぎはタイ人の仲買い人に売られ若干の現金を村にもたらす。しかし，豚と鶏はおもに儀礼のいけにえ用に使用されるだけである。従って村の経済はほとんど自給の域を出ない。しかしながらこの村落社会は近年になって急激な変化をよぎなくされるようになった。その原因を大把みに要約すると次のようになるであろう。

1) 政府の行政が次第にこのうな奥地にまで及ぶようになってきた。

2) 平地部の市場経済の影響が波及するようになってきた。

3) Hod と Mae Sarieng をつなぐハイウェーの工事が進み，村から数キロメートルの所にタイ人の道路工事のキャンプができた。それにより好むと好まざるとにかかわらず，タイ文化との接触をよぎなくされるようになった。

これら三つの原因のなかでこの地方の Karen の社会に最大の衝撃を与えたものは政府の影響であろう。それがもっとも典型的に現われたのは山地民に対する焼畑耕作の制限である。この行政措置のおもなねらいは山地民の間で広くおこなわれていた麻薬の原料になるケシ栽培を押えることと，タイ国中部の穀倉地帯を潤す Chao Phraya などの河川の水源地における森林を保護するのが目的であった。これは中央政府の当然の措置であったが，山地 Karen のみならず，他の山地民にかなり深刻な影響を与えたことは間違いない。森林を焼却することを禁じられたかれらは陸稲を中心とした焼畑農業から水稲を中心とする定着農業に移らなければならなかった。しかし，水田を開拓すると言っても，すでに適地はタイ人によって占取されている。その上，陸稲は山地民の低い施肥技術の水準から言うと，焼畑をして新しい土地を次々と開拓して畑地に変えてゆかな

水田で草取りをしている S'kaw Karen の女たち。

①村の実名は村人のプライバシーを守るために発表を差し控える。報告書にも仮名を使用する予定である。

い限り，反当収量が毎年急速に低下してしまう。新しい森林を開けない現在，わたくしの調査村の Karen などは畑を約7年休閑して，ロテーションをしている．しかし，それとても地力の回復は充分とは言えず，近年生活が苦しくなったと言う．

第2に Karen の場合，焼畑の制限のために結婚後男が女の家に行って住むという matrilocal な伝統的居住形態が維持しにくくなり，最近は与えられた条件によって任意に居住形態を決める ambilocal な傾向が現われてきた．婚姻後の居住形態を決める要因が従来の慣行的なものから，むしろ田畑が夫の方にあるか妻の方にあるかというような経済的なものに変わりつつあるようだ。

第3に焼畑はかれらの重要な経済活動のみならず，Karen にとってはそれをすることによって，山の霊を慰るという信仰生活の一部でもあった。そのため焼畑の制限はかれらの信仰に混乱を与えた。村が移動をしなくなったので，それにともなってかっては Karen の儀礼の中でもっとも重要な Talupadu のようなものが急速に簡略化もしくは消滅しつつある。このように山地 Karen の文化変容の速度は非常に大きく，時には平地の Karen を追い越すほどである。たとえば平地に分布し，よりタイ文化に親んでいる P'wo Karen（時には一部の S'kaw Karen）ですらまだ男が Karen 特有の長髪をまるめた伝統的なスタイルを守っている者が少くない。しかしながら，山地の Karen の間ではもはやほとんどそのような伝統的な髪の形を保持している者はいない。その理由を尋ねてみると，ある Karen は〝近頃は畑にする土地が限られてきたので，生活が以前より少なからず苦しくなってきた。だから，髪などのなり風に時間をかけられなくなった〟と言うのである。果してこれがどれだけこの種の急激な文化変容の原因を説明しているかどうかは別として，焼畑による森林の開拓禁止という政府の行政指導は Karen をはじめとする山地民の社会に意外に大きな衝撃を与えていることは事実のようである。

その衝撃が山地民の経済に与えた影響も少くはない。ケシ栽培は Karen の間ではあまり盛んではなかったけれど，Meo, Yao, Akha, Lahu, Lissu などの山地民の間では重要な生業の一つであった。場所によっては1戸当り年間に約3,000～4,000バーツ（54,000～72,000円位）の純収益をもたらしていた。この額は山地民にとって決して少い額の金ではない。しかしながら，タイ国政府の熱心な努力にもかかわらず，今日までのところケシに代る商業作物は見出されていない。ある程度粗放栽培が可能で収益が高く，かつ山道を運送しやすいという条件を満す農作物はなかなか無いのである。

以上のように，中央の影響がへき地に及んだ場合に生ずる混乱というものは決してタイ国だけの問題では無い。これは発展しつつある国における nation building の不可避な過程なのである。

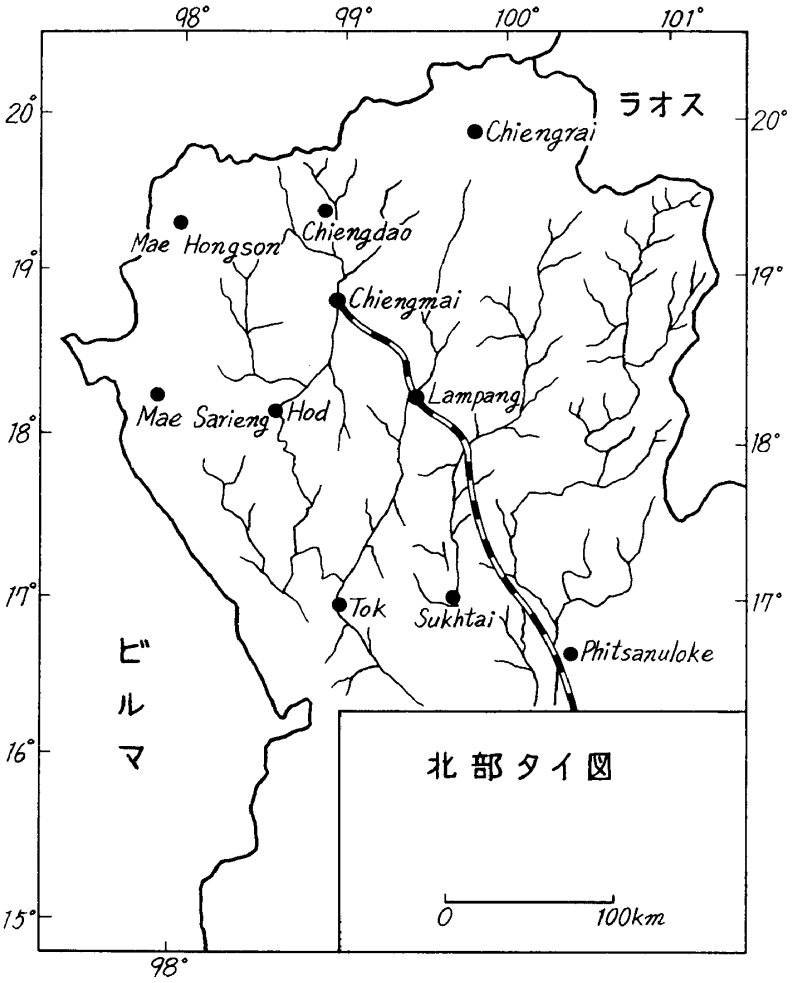
市場経済の山地 Karen 社会に与えている影響であるが，近年においてはいちじるしいものがあるけれども，大部分の山村の経済はまだ自給の域を出ていないので，市場経済の影響は構造的なものにまでは及んでいないようである。しかしながら，タイ文化の影響が歴史的に見てもかなり長い期間にわたって Karen の文化の上に及んできたものであるのであるから，ビル

平地から来た P'wo Karen の一家．かれらには仏教の影響が強い。

マの Karen と比較するとかなり cultural drift をおこしているようである。それは言語にタイ系の単語が混入しているだけではなく，儀礼の中にもタイ人もしくはタイ国北部に古くから定着している Lawa 族などと類似するものが目につく。

さらに Karen のタイ化の過程で人類学的に興味を引くのは仏教化の問題であろう。山地 Karen にはまだ本格的な仏教の影響は無く，animism がその信仰生活の基礎になっている。そのような状態のところにローマン・カトリックやバプティストの宣教師が入り込んでいるけれども，ビルマのような旧植民地国家とは異りキリスト教の Karen を初めとする山地民への影響は決定的なものにはなっていない。

このような山地 Karen に比べて，平地 Karen は日常仏教徒であるタイ人や Lawa 族と接触しているので，仏教の影響が大きい。とりわけ P'wo Karen においてその傾向が顕著である。しかしながら，平地の Skaw Karen もその例外ではない。もちろん，Karen の仏教[1]にはいまだかなりのアニミスティックな要素が残っていることは言うまでもない。



わたくしは当面山地の S'kaw Karen の調査に専念する積りであるけれども，目下滞在して調査をしているこの山村の調査が一段落したならば，20キロメートルほど西方にある Mae Sarieng の谷におりて，平地に定着している S'kaw Karen を調査するつもりである。そして，山地と平地の Karen を比較することにより，山地民の plain emulation（平地の文化を模倣すること）の過程を研究する予定である。それは平地 Karen の文化のあり方は山地 Karen の文化の変容の方向になんらかの示唆を与えると思うからである。

調査村ドーン・デーング

水　野　浩　一

日本を離れて4ケ月半，バンコックの生活からも遠ざかり，また設営の煩わしさからも解放されて，ようやく調査村に定着したところである。したがって，現在までの活動状況をも交じえながら，村の様子について記してみようと思う。

村の名はドーン・デーングといい，バンコックの東

北部の町コーンケーンから20キロほど南に下ったところにある。開拓当時，辞書には Xylia Xylacarpa とみえ，その葉は紅い木が多数繁茂していたところから「紅い木の茂る丘」もしくは「紅い丘」とよび習わすようになった。こうした命名法は他にも少なくなく，「丘」，「台地」，「沼沢」など地勢を示す語を前に出し，その形状を特色ずける言葉や，そこに繁茂する植物，または棲息する動物の名を付して村名とする例が多数みられる。

最初にこの地方を訪れたのは6月の末であった。その目的はコーンケーンに適当な中継地を設けること，通訳をさがすこと，また村落にはいる手蔓を求めることにあった。コーンケーンは県名であるが，そこには二つの行政都市がある。一つは県名と同じくコーンケーンといい，他の一つはポンという。前者は人口2万弱，後者は5千人ばかりであるから，都市というよりは町といった方が適切だろう。両者ともその中心街が華僑経営の商店にあることは，他の町と変りない。コーンケーンの町が新興都市としての印象を与えるのはここ数年間に，官庁，公共施設や学校が改築，新設されてきたからである。しかしながら町自体の内的発展力は弱く，繁栄は中央の地方への発展として把握した方がよい。新しい県庁の建築様式は，中央の地方への進出，地方の中央への依存を象徴するかのように，聳えている。

通訳に関しては，幸い，官庁クラブのマネージャーを勤めるかたわら，外人宣教師にタイ語を教えているという青年に出あった。学歴は浅いが，発音にタイ人特有の癖がなく，語彙もかなり豊富である。地方育ちだから純朴だし，方言に強いのもとりえである。バンコックと地方の村との間には生活様式，ことに言語や食生活が異なるから，地方育ちの通訳を雇うならば，それだけ調査期間中の生活面に伴なう煩わしさを削減してくれることになるし，また価値体系の親近性のゆえに村人との接触面においても，摩擦が少ないはずである。

この地方の村人は餅米を主食としている。蒸しあがったものを手で握って丸めながら，ナム・プリッグをつけ，副食を添えて食べる。副食には，ラーブ・スアといい肉をつぶして唐辛子であえたもの，ラーブ・タウといい沼でとれた藻を唐辛子であえたもの，など各種のラーブがある。その他，雑魚，蟹，田螺，また筍や木の芽など自然のものを利用することが多い。「パイ・ハー・ギン」といって，食前にこれらを採集してくる。私たちの考える野菜類は町方の食物であり，村の中では手に入りにくい。特別の日を除くと，ふだんは料理に火を使うことが少なく，肉類も生を好む。肉としては水牛，牛が使われるが，これらの調理は男性が受け持つ。女性がこうした食物を料理するようになるまでには，よほどの年月が必要であるらしい。

言語もバンコックの言葉とはかなり違う。知識あるものは東北の方言だというが，ラオだと意識している村人は多い。母音や子音に変異があるばかりでなく，語彙自体が異なる場合や，使い方の相違も目につく。ちなみに2，3の例をあげるならば，出小屋のことを中部地方では，グラトーブ，北部地方ではハーング，東北地方ではティアング・ナーという。中部，北部地方では，田畑1枚のことをカンナーといっているが，東北地方ではカンテーという。中部では，文の末尾に男性はクラッブ，女性はカーを付して，尊敬の意を表したり，丁寧な表現法とするが，東北部の村では殆んど聞かれない。そのかわり文の末尾にボーという音が来る。しかしこれは疑問詞であり，中部ではマイという。町の人間は村人の粗野な言葉つきを軽蔑する

マット編

水干れ年の田植

行政都市コーンケーンはその中心部に位置する。予備調査の範囲としては，ムアング郡内の主要道路の沿線に限定した。さもなければ雨期には浸水のため，交通が全く遮断されるからである。第2に，仏教徒の村で米作を主要作物としていること，第3にコーンケーンの特産であるジュートを栽培している村を選んだ。また，できれば村の範囲と寺や学校の社会圏が合致することが望ましかった。

し，村人は改まった言葉遣いを笑う。

生活の条件も通訳も見当がついたので，若干の村を訪れてみた。一つはコーンケーンの町の近くにあり，他の一つはポンの町の近くにある。このときは，村自身の性格の差異よりも，案内者もしくは村への接近の仕方における相違の方が，印象的であった。コーンケーンの場合，村への接近は単に行政組織を通じてのみであったために，村人の反応が表面的であった。これに反してポンの場合は，それ以外の社会的要因が存在していたために，よりいっそう親密な態度がみられた。ポンの町の案内者はバンコックで知りあった友人で，この郡で唯一の保健診療所勤務の医者である。若いがその能力のため，役所でも力があり，また献身的な仕事ぶりのために村人から信頼されている。しかも彼は父親が中国人であるために，華僑社会ともかなり親しい。ポンの町に中継所を設ければ，村内への接触，浸透は，はるかに容易である。しかし通訳調達上の都合から断念せざるを得なかった。

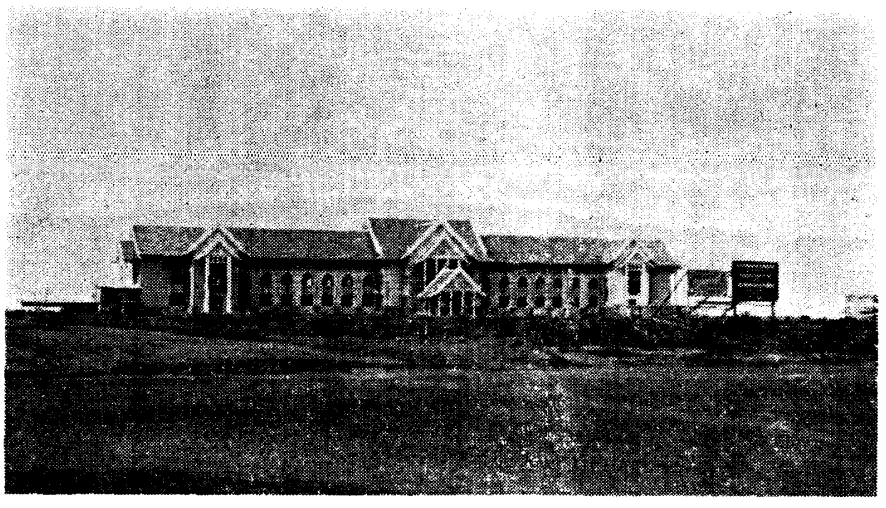
二度目の予備調査は7月19日から4週間であり，前半は村探し，後半は地図や戸籍の筆写のために費やした。県内には10の郡が存在する。そのうちの一つをムアング郡といい，17の行政区・タンボンからなっている。

ドン・デーングは自然村であると同時に，行政組織上最小の単位であり，村には村長1名と助手が2名いる。村の中央に木造の集会所があり，集会は月に1回，あとは必要に応じて催おされる。村長の家には，招集の合図を知らせるために，竹製の鳴物ゴローが備えられている。家屋は高床式で，比較的密集して建っているから，境界が明瞭である。その他の地所を含む村の境界線は必ずしも明らかでない。しかし，村人は一定の地域を持ち，また共同所属の感情を抱いている。村内には寺があり，近くに学校がある。寺は隣村と共有，学校は4ケ村共同である。タイ国の村落コミュニティーの定義として「寺と学校を共有する社会圏」とあるけれども，この概念規定と現実は必ずしも一致しない。

当村は今から75年ほど前に，東方に位置するローイ

牛の料理

エットやマハーサラカムあたりから移住してきた人々によってひらかれた開拓村である。かれらは兄弟，姉妹などと共に数家族ごとに集団をなして流浪の旅を続けて到来した。最初の年はわずかな土地を切りひらいて家屋を建て，翌年は灌木を切りひらいて稲を植えた。大木は徐々にしか伐採出来なかった。開墾中，村人は米を手にいれるために種々の穫物を持って，すでに定着した村にでかけた。今では使うことのない横弓，弾き弓，吹き矢，仕掛け罠を用いて，鹿，野豚，野鶏，兎　鳥などをとらえたという。当時の村人にとって，狩猟，採集は今日よりもいっそう重要な位置を占めていたにちがいない。



新築中の県庁

村人たちは森の精霊をピー・パーと称して畏れ，村の近くにある自然の塚に住まうものとして，これを祭った。開拓後，数年もするうちに村の戸数は40にも達したので，村内に寺を建立しウァット・ポーバンラングと名づけた。それは村の定着と繁栄を物語るものであった。それと同じ頃，村人たちは自然の塚の上にも小さな社を設け，これをトウカタープーと称して，鶏や亀を供物として俸げたという。そして村にはお守り役を1人おいた。その後数年してこの社を近くの大木に移したとき，村内の中ほどにブー・バーン（村の中央の意）といって木の柱を建てた。かれらは村の繁栄を願って悪霊からまもるために新しく設けたのである。これは森の霊とは異なり，仏教的色彩の濃厚な聖地として崇められている。そしてブー・バーンに祈るに先だっては，トウカタープーに供物を俸げるのが常であった。今日トウカタープーの方はすでに村のリーダーによって破壊されてしまったので，ブーバーンしか残っていない。ちなみに中部地方やコーンケーンの町では，サンプラプーミーといい，各家の入口に柱風の社を建て，家・屋敷を司どる霊としているが，それはトウカタープーの変形であるらしい。

コーンケーンへの三度目の旅行は，8月21日であった。ドーン・デーング村への最初の接触や，宿泊所に関しては県庁や県役所の役人や作業員の方々に大変お世話になった。しかし，まだ充分村内に浸透したとは感じられなかったので，9月1日の定着日までの間，出来るかぎり村人と接触することに努めた。毎日町から村へ通い，タムボンの集会に参加し，村内を歩き，寺の行事には寄進をし，保健所の新設には寄付をした。その間，物質文化についてたずねてみたり，ときには相手の関心にまかせて受け答えたりした。日本の動，植物，自然，農耕，作物，宗教，婚姻，家族など，かれら

得度式

ケナフの皮むき

の儀礼のときに，また長く村を離れた人が帰村した場合などにはクワンの強化が行なわれる。

儀礼のリーダーはやはり村の最長老者であり，村長は司会役を演じ，配下が牛を料理する。式にあたっては，高杯の上に青銅製の器をのせたものを準備する。供物は二種類あって，一つはクワンに捧げられる。テーワダーのためには，タバコ２本とベテルーナットをバナナの葉に包み，ローソク２本と共に御神酒をいれた瓶の上に立て，器の中央に置く。クワンに供える食物としては，バナナ４本，卵４個，餅米を丸めたもの４個を瓶のまわりに４ケ所に分けて置く。器内の敷物としては，バナナの葉で編んだもの４枚を使用する。普通は，この容器の前に２組の男女が坐る。

の関心は多方面にわたり，懸命になって話を通じさせようとする努力がみられた。通訳も初めは連れて行かなかったが，彼の信仰態度や相手を思う心（アウ・チャイ・カウ・マーサイ・チャイ・ラウ）に村人と共通な点があるため，村人との接触において支障をきたす恐れは全くなくなった。そして10日もするうちに，村人の中から村内居住の許可書を獲得できた。つまり結婚仲介の申し出である。

定着の最後の段階は村入りの挨拶であろう。こうした点について種々言葉を変えてたずねてみたが，一向要領を得なかった。致し方なく小牛１頭を提供して，村人を招待してみようと考えた。後ほどわかったことであるが，この村にとって村入りの儀式などは必要ではない。入村者の殆んどが婚入者であり，新入者は結婚式によって自動的に村内の社会的位置づけが与えられるからである。社会的位置づけとして重要な機能を果しているのはやはり親族関係である。

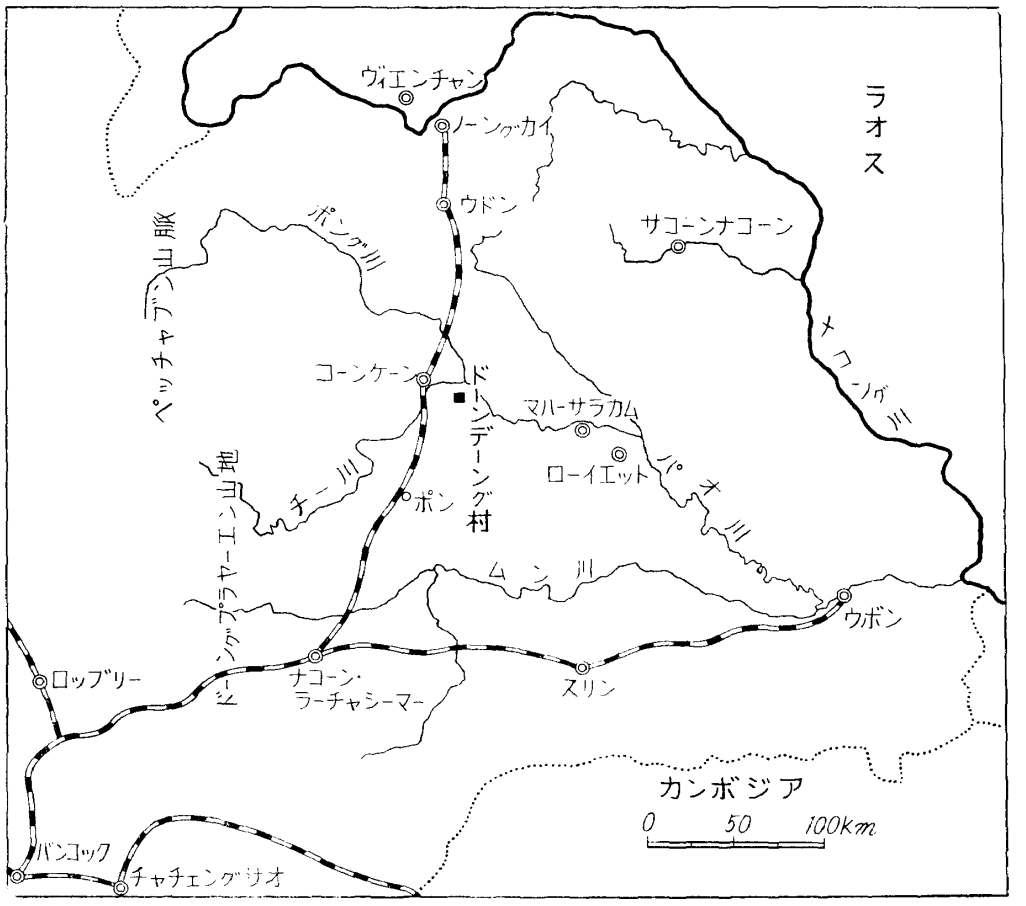
当日は招待者の３倍以上もの人が集った。予想外の収穫は，村長をはじめ村のリーダーが調査者のために村入りの儀を営んでくれたからである。このために全く主客転倒し，調査者は村人から正式の歓迎をうけることになった。その儀礼はパー・クワンといい，村人自身は村入りの儀礼だと意識していない。クワンは頭に宿るとされている生命力ないし魂であり，生存中の人間の精神状態を司どる。一時の不在が夢として理解され，消失した状態が死である。したがって人の一生を通じて村人たちはしばしばクワンの強化儀礼を行なう。出産や病気に際して，出家の式，結婚式，家建て

儀礼は，二つの要素から成っている。一つはクワンを呼ぶ呪文であり，他は社会的要素である。リーダーは先ずテーワダーを呼び，クワンの強化を祈る。続いて呪文に移るが人により内容は多少異なる。以下内容を紹介しょう。季節感があって興味深い。「旧暦６月が来ると新しい年が始まる。雷と稲妻を伴ない，雨は花を潤おす。露のために魂は寒さにおびえる。魂よ，おいで，衣服をまとってあげよう。主の頭にとどまり，遠くへ行かないでおくれ。香のよい花レーテー，マーテー，ラガーの花も咲きほこっている。テーンチャムピァの花も地に咲きみだれている。谷の下は明るい。お前が遠くはなれると，母親は心配して嘆く。クワンよ，森の中を迷うことなかれ。主の頭に戻り，龍と戯れることなかれ。クワンよ，安心してこちらにおいで。櫛も衣類もある。香のよい木チャンダイやチャンホームもある。すべてお前のために用意してあるのだから。ベテルーナット，バナナ，砂糖きび，ココナツ，カレー・スープ，それから鳥も。急いでおいで，急いで。６月の末は尾長猿が吠える。外は雷と稲妻ばかりだ。クワンよ，主の頭にとどまれ。宙に迷うことなかれ，宙に迷うことなかれ。空には鳶がいる。遠くへ１人で行くな。魂よ，戻り来たれ。卵もあるし砂糖もある。来たりて食らえ。来たれ。そして安らかにと

どまれ。5つの悪霊に打ち勝て。クワーンよ来たれ。クワーンよ来たれ。」クワンのあとには本人の名を付してひとしきり大声を出して呼ぶ。

呪文が終ると，リーダーに続いて村人達が近よりそれぞれ糸を両腕に巻きつける。同時に無事息災を祈りながら合掌する。さらに援助のしるしとして幾ばくかの金を器の中に入れる。その間40分位，当人は両手を差出し，村人の言葉に応えるために，その両手をわずか上にあげる。手の上には餅米がのっている。誰が糸をまきつけるとはかぎらない。それは親戚であり，知人であり，よき友である。この間に当事者は多数の情愛を感じて一種の安心感を覚える。と同時に，そういう人達とは生活を分かちあってもよいという感情に駆りたてられる。糸の数は50本であった。援助金は13バーツしかなかった。儀礼の心理的効果は，当事者が真剣であればあるほど大きい。その儀礼が終ってからは，相互にいっそう親近感を抱くようになったし，また村のリーダー格の1人が進んで案内役を申し出てくれている。私たちは，父親の尊称を付して彼を，ポー・ルンとよんでいる。

村内の社会組織の重要な要素はやはり親族関係である。実際に親族関係がなくとも，年長者にはポー（父），メー（母）の尊称を名の前につけてよぶ。親族名称は，父方，母方においてほとんど差異がない。曽祖父の代においてはプー・トウアッド（曽祖父）とヤー・トウアッド（曽祖母）しかなく，父方，母方に適用される。祖父母の代においては，ポー・プー（祖父），メー・タウ（祖母）が父方，母方に適用される。祖父母の兄弟姉妹の年令順位を示すためにはヤーイ（年長）とノーイ（年少）を付して区別する。父はポー，母はメーという。父方，母方とも父母の兄はルング，姉はパーである。但し，父の弟，妹はそれぞれアーウ，アーであるのに対し，母の弟，妹は共にナーである。この世代の年令順序は次の世代以下にもうけつがれるから，ルングの息子はやはりルングであり，娘はパーである。パーの息子はルングであり，娘はパ



ーである。世代間の区別をするために，父母の兄弟，姉妹の場合は各語の前にポーないしメーを付し男女の区別をする。父母の兄弟姉妹の子供に対しては各語の後に名を付して使用する。自己の子はルーグ，以下ラーン，レーン，ローンとなる。自己の兄弟，姉妹はピー，ノーングであり，その子はラーン，以下レーン，ローンで終る。

興味をひく点をあげるならば，第1に父方の兄弟姉妹に対しては四つの言葉があるが，母方の兄弟姉妹に対しては三つの言葉しかなく，男女とも母より若い者はナーである。第2は，父母の世代における年令区別がそのまま，かれらの子孫に踏襲されていることである。具体的な例は今あげることが出来ないけれども，親戚中における親近性の順位は，第1に兄弟姉妹，第2が母方の親戚，第3が父方の親戚，第4が妻の親戚である。系譜集団や民族は存在しない。ただ次にも記すごとく，夫は妻の両親と生活する機会が多く，したがって子供は母の両親や兄弟姉妹と生活する蓋然性が大である。

この村の婚姻年令は男性の場合，だいたい21才から23才であり，女性の場合は18才から20才位である。ほとんどの男性は結婚前に僧としての勤めを終えている。婚姻は相互の愛情が主となっているらしいが，結婚式のためには仲人をたてる。シン・ソードといい，夫は妻の両親に宝石なり金を贈る。この村では 300バーツから2,000バーツまでの変差があるが，平均1,000バーツ位である。この額のかけひきには，仲人と娘の叔父が主役を演ずる。その後，妻方は夫方の両親，親戚に敬意を表して衣類などを贈る。婚姻の式は娘の家で行なわれ，夫は当分妻の両親と共に暮す。その期間については一定の規則はない。幾年，妻の両親と共に生活するかは，田の大きさ，労働力，性格，夫の経済的能力などの要因により左右されるらしい。婚姻前に男が女の家を訪れることはあるが，泊ることはない。

村落の基本的，社会的単位は夫婦を単位とする家族である。しかし実情にもとづいて考えてみると，家族構成はだいたい三つの形態に分けられる。第1は夫婦とその子供からなる核家族，第2は夫婦と未婚の子供，娘夫婦とその子供，第3は田を共有する，より大きな家族集団である。

妻方居住制のため，第1の形態から第2に移行することは容易に理解されるだろう。この場合，夫も妻も田を所有していないから，2人は妻の父母の田で働く。通常，夫は婚姻に際して水牛などを彼の両親から贈られる。かれらは米倉を一つにし，家計を一つにする。やがてこの家族が成長してくると，この夫婦は三つの生活法を考え得る。一つは今までの家族から完全に独立して新しい居を構まえることである。その際，妻の両親から田を譲りうける場合もある。第2は従来通り妻の家に住む。この場合下の子が婚姻して同居する可能性もある。第3は，新しく家を建てて寝食は別にするが，田に関してのみ妻の両親に依存する形態があり得る。したがって兄弟姉妹が婚姻後も食を共にし，家計を共にすることもあり，また田を共通にすることによって一つの生活集団を形成し得る。妻方居住制を前提とするならば両親と姉妹の夫婦とその子供からなる家族形態が生じる蓋然性が大である。もっともこうした家族も，両親の死を契機として消滅する。両親のプリファレンスとして，息子よりも娘夫婦と共に生活することを好むようだし，年上の子よりも年下の子と共に住む可能性も多いようだが，明確なことはわらなかい。

2日の村入り儀礼の後，主な仕事は世帯調査にある。すでに戸籍は写してあるものの，村内の移動が激しく，未だに正確な人口や家族数さえわかっていない。郡役所の戸籍は区長カムナンの報告を基礎としているが，かれの記入帳そのものが要領を得ない。したがって130軒全戸を訪ずれ，チェックすることにした。質問項目は以下の通りである。1世帯主。2世帯員と続柄。3年令。4教育程度。5出家経験。6職業。7出生地。8婚入，入村理由と入村の年。9婚姻年令。10家屋の棟数，部屋数と所有主ならびに穫得形態。11田，畑，庭の所有規模と所有主ならびに穫得形態。12小作関係。13水牛，牛，馬，豚，鶏，家鴨の頭数。14牛車，自転車の有無。15ラジオ，ミシン，柱時計の有無。

今はちょうど安居期に相当し，寺では種々の催しものがある。安居の期間は旧暦8月15日から11月15日までの3ケ月間であり，20才に達した男子が仏門に入り修業する。村の人達はこの間中，旧暦上弦と下弦の8日と15日に寺に詣で，僧に食物を進呈し徳を積む。トード・ティアンと称して蠟燭を奉納する行事が各村で順番に催おされる。遠くの離れた村と昔からこうした

行事を交換している場合も存する。行事に参加する村人は，年寄りと若い青年男女と子供が多い。若い人達にとってはやはり一つの楽しみであり，太鼓などをたたいて行列の先頭に立つ。その他今まで見た行事には，ブン・サードといい村の人達がマットを編み，寺に寄進し1年の行事費にする催しがあった。旧暦10月15日は祖先の霊をとむらう日であって，カウ・サーグの日といわれている。菓子類を用意し，様々な食物を作って寺に詣で，僧侶に食物を捧げた後，寺の周囲にある木の根元に供物を捧げる。父母の霊が木に訪れるからである。

安居期が終るとやがて稲刈りが始まる。しかしながら今年は雨が少なく早稲の量は少ない。事実，第1回目の旅行から定着までの間，雨に煩わされたことはなかった。どの田も全く水がなく，耕作する姿がみられず，農民達は出小屋に出てはむなしく雨を待つ風であった。しかしひとたび雨が降れば田や道路は水没しになる。この地方の稲作は完全に天候に支配されている。しかしまだ遅くはない。安居期が終るまで田植えが可能であるからである。その頃までは村の男達も村の外に働きに出ることはない。女達はマットを織るのに忙しく，男達はその材料になる草を採集するために沼沢に出かける。それを売って米を買う金をためる。この村では，7月，8月，9月が1年の中で経済的にいちばん苦しい。それはちょうど稲刈りの前であり，ジュートの収穫が終って，かなりの月日が経った頃に相当する。

調査すべき問題は今山積みになっている状態である。それも徐々に解決していかねばならないが，当面の主な仕事は世帯調査にある。来月の半ば頃には一応終る予定である。村の概観としては不充分であるし，また片寄りがあると思われるけれども，以上いままでの活動状況を交えながら，村の様子を記したものである。

9月27日コーンケーンにて

棚瀬襄爾先生をいたむ

人生五十年とはよく言われますけれども，現代の世では考える必要もないことと思っておりました。毎週木曜日，先生は文学部での演習のあと，今夏自ら四カ月にわたって参加されたマレーシア現地調査の調査票集計結果に目を通され検討されることになっておりました。十二月十日の朝，先生はいつまで待っても研究室へお姿をお見せになりませんでした。そのとき，先生の身に何がおこっていたかは想像もしませんでした。

先生は京都大学東南アジア研究センターの設立に，当初から非常な精力をお注ぎになりました。そして，この夏にはセンターの中心的な計画の一つであるマレーシア・インドネシア計画の最高指導者として，自ら予備調査に出発され，マレー半島北部の小さな田舎町とその周辺の村落とを調査地に選んで，後続の調査隊員達をお迎えになりました。住み馴れぬ家屋，変化のない食事，雨水を煮沸した飲み水，そしてやけつくような太陽，先生は不眠になやまされながらも，自ら歩き廻って意欲的に資料をお集めになりました。学者としての生活に油ののりきったお年とは言え，肉体労働に近い調査活動は，先生にとっては余りにも厳しすぎました。そのときの先生の御無理が今日の悲しみにつながっているのではないかと思えてなりません。四階の研究室への往復でさえ息切れを感じると言われていた先生でした。

先生は余りにも大きな重荷を私達に残して御他界になりました。私達はどうにかしてそれに耐えようと思います。そしてそれを先生の目ざされた目的地へと力を尽して運んでいこうと思います。

（坪内良博 記）